会議報告

村上所長が日本学術会議主催「持続可能な社会のための科学と技術に関する国際会議2009－食料のグローバルな安全保障－」にて講演

9月17～18日に開催された日本学術会議主催の標記会議において村上所長が“Challenge to control the animal diseases; the implications for the sustainable productivity of livestock”と題して講演しましたのでその要旨を紹介します。なお、この会議は2003年から学術分野ごとに年1回開催されており、食料の安全保障をテーマとした今回は第7回目にあたります。

現在、多くの国際機関の連携により、伝染力の強い偶蹄類のウイルス病である牛疫の根絶プログラムが2010年の達成を目標に進められている。牛疫はかつてユーラシア大陸からアフリカ大陸にかけて猛威をふるい、多くの国で膨大な数の牛や水牛を死亡させてきた。またその流行は、家畜の生産を阻害するのみならず、耕作や輸送のための役畜を失うことで作物の生産にも大打撃を与え、流行地域の農業全体に壊滅的な被害を及ぼした。悪性伝染病を代表するこの疾病が、長い防疫の歴史を経てまもなく根絶されようとしている。

牛疫の防疫のように、動物衛生分野における科学技術の進歩が家畜の疾病を防除し、ひいては畜産の振興に貢献しうることは間違いない事実である。しかし、人類は将来にわたり重要な家畜疾病を克服できるであろうか。FAO統計によると、「畜産の革命；Livestock revolution」と呼ばれるように、新興国を中心とする需要拡大を受けて、世界の畜産物の生産量は急速に増加している。とくに、主要な生産基地は北から南の地域に向けて、あるいは温暖な地域から亜熱帯や熱帯地域に伸展し、現在も拡大を続けている。しかしながら、それらの地域は獣医衛生対策が必ずしも充分機能しているとは言えず、依然として疾病発生の高いリスクを孕んでいる。このような環境の中、輸送手段の発達を伴う産業のグローバル化により家畜や畜産物の国際流通が活発化している。その結果、人獣共通感染症としての牛海綿状脳症や高病原性鳥インフルエンザ、あるいは動物疾病としての口蹄疫や豚コレラのような新興・再興感染症を含む越境性動物疾病（Transboundary animal diseases; TADs）が世界の畜産振興に大きな影響を与え、世界の食料安全保障を脅かすようになった。さらに近年の気候変動はブルータングやウエストナイル熱のような節足動物媒介性感染症の流行地域の拡大に拍車をかけている。それゆえ、これらの疾病の防除は、世代や地域を越えて食料の安定供給を確保し、畜産の持続可能な発展を維持するためにきわめて重要な案件になっている。

TADs の発生は気候変動、都市化、森林破壊、野生生物の分布拡大等の環境要因に影響を受けやすい農業生態系における生物多様性と関連しており、それらの疾病との戦いには、さらなる獣医学の進展に加えて、多くの関連分野との学際的研究の推進が求められている。加えて、TADsの発生に関する早期警告を通じて疾病の拡大を防止するため、国際協力の強化は必須である。疾病防除の高度な技術戦略に裏付けられた国際機関の役割もまた、国際的な防疫活動を進めるためにますます重要なものとなっている。

講演の発表資料等は次のサイトでご覧いただけます。
http://www.scj.go.jp/ja/int/kaisai/jizoku2009/ja/index.html